

学生の社会的活動報告

森田イベントでの活動

生活科学学科 生活デザイン専攻 2回生 田端 桃子

5つの卒業研究チームは「もりたシャルソン」「森田文化祭」に参加しました。私は人の集う場について考察する卒業研究をしていたので、実践として参加させていただきました。私たちは、移動式の屋台で人の集う場を開きます。屋台で人の集う場を開いてみたい!という私の思いから生まれたものです。身近にあった廃棄物を活かす研究をしている岡崎さんに協力していただき、森田のイベントに参加する学生と一緒に移動式の屋台を制作しました。

イベント当日は、屋台を仁短から目的地までみんなで押して向かいます。私たちは、卒業研究に沿った雑貨やアクセサリを販売したり、学生と先生で作った梅ジュースをおすそわけする屋台を開いたりしました。例えば「うんこ」をテーマに卒業研究をしているチームpoopは、うんこグッズを販売し森田の子供たちに大人気でした。似顔絵屋を開いた私は、二度森田でのイベントに参加したので、もりたシャルソンで似顔絵を描いた高校生のお父さんが森田文化祭に来てくるという事もありました。私の得意なことが人と私・人と人を繋いでくれる役割を果たしていることに喜びを感じました。

森田のイベントを通して協働できる仲間ができました。一人で屋台を開くときには感じられない、同じ熱量を持った仲間との「人が集う場づくり」は素晴らしいものでした。また、イベントで得た個々の利益の1/4は、次の人が集う場を開く為に役立てられています。今あるものとの繋がりを深めるきっかけを与えてくださった森田のイベントに感謝しています。



短大から会場へ向かう様子

サイバー防犯啓発グループPsybernic'sの活動

生活科学学科 生活デザイン専攻 2回生 野坂 亜鼓

私たちは、県内の他大学の学生と共に、サイバー防犯啓発グループPsybernic'sに所属し、ボランティア活動を行いました。Psybernic'sはインターネット上のトラブル防止の啓発を目的に結成されたグループです。本学での活動メンバーは生活デザイン専攻の石井祐奈さんと田端桃子さん、私野坂の3名です。主な活動内容は、サイバー防犯に関する啓発ポスター・書籍の制作でした。



書籍デザイン提案の様子

インターネットが普及し、あらゆることが便利に、早く、簡単にできるようになった現代。その反面で、犯罪やトラブルに巻き込まれる事例が増えているようです。同世代に向けて啓発を促すべく、学生目線での啓発書籍を制作することになりました。イラストや言葉で何がどう危険なのかを伝え、自分自身の実体験をまとめました。書籍の制作にあたっては、他大学の学生とのグループディスカッションを重ねました。書籍のタイトル・サブタイトル案を出し合ったり、身近に起こったインターネット上のトラブル例を挙げたりと、意見交換を行いました。年齢も学んでいることも違う学生同士が、同じテーマについて考える機会は短期大学生の私にとって新鮮な場でした。

Psybernic'sのボランティア活動を通して、インターネットトラブルや犯罪に関する知識や対処法を学んだだけでなく、他大学との学生と交流する貴重な経験ができました。学内にだけに留まらず、学外での様々な活動に足を運び、実戦経験を増やすことが短期集中で自分を成長させることへと繋がったように思います。

台湾研修

生活科学学科 生活情報専攻 2回生 大門 友美

昨年5月、生活情報専攻の学生を対象として台湾研修についての説明と参加者の募集がありました。募集の結果、2回生は私を含めた4名、1回生は3名の計7名が参加を希望しました。私にとって初めての海外で不安はありましたが、担当の先生が同行してくれること、頼りになる友達がいることで安心することができました。そして台湾における活動のビッグプロジェクトとして、現地の出版社に出向き「本の売れ行きを伸ばすためのアイデア」を英語で発表することになりました。そこでまずはこの出版社がどういう人を対象に、どのような本を出版しているかなどの情報収集を行いました。調査の結果、音響機器の雑誌であり、購読者は年齢が高めの富裕層で女性よりも男性が多いことが分かりました。そこで私たちは1回生と2回生の2グループに分かれて、若者と年配の方を対象にアイデアを考えることにしました。年代ごとに分けた理由は、新たな顧客づくりを促すために若者をターゲットにしたかったからということと、元々購読している50代～70代の方に定期購読者になってもらいたかったからです。私たちは何か月も時間をかけて、アイデアをパワーポイントにまとめプレゼン資料を作成しました。内容として、1回生はLINE・Twitter・InstagramなどのSNSを活用して雑誌の情報を発信することや、雑誌の表紙をオシャレにすることでインテリアとして活用してもらうなどといった若者向けのアイデアを考案しまとめました。2回生は、雑誌の付録を一ヶ月ごとに一部のパーツにして何か月も購入すると付録が完成する方式にすることや、半年や一年といった長い期間購読してくれた人だけに特典を付けるというように定期購読者を増やすためのアイデアを考案しまとめました。また雑誌のミニチュア版の発行のアイデアも加えました。プレゼン資料が完成に近づくなか、日本語を英語にするという作業に最も苦労しました。というのも、英語には一つの単語に複数の意味があり、単純に訳すだけでは言いたいことが伝わらなかったからです。そこで翻訳アプリや辞書を使って意味を精査し、分かりやすい文章に再度直して英語にすることにしました。台湾に出発する直前に、写真を多く使って英語版にしたプレゼン資料が完成しました。本番の発表では出版社の方に私たちのアイデアが伝わり、「面白いアイデアだった」とおっしゃっていただくことができました。海外の方にプレゼンすることの難しさや、アイデアが伝わった時の嬉しさや達成感を味わ

えたことは、私たちにとって貴重な経験になりました。中正記念堂や故宮博物院など台湾の観光地を巡ったり、タピオカドリンクや小籠包などの台湾名物も食べたりして、思い出に残る3泊4日の時間を過ごすことができました。



木のおもちゃ博

幼児教育学科 2回生 南 京花

私たちは、産業会館で行われた「木のおもちゃ博 木育キャラバン」に、香月ゼミのボランティアとして参加しました。世界中の良質な木のおもちゃが1,000種類以上あり、県産木材を使用した木育ワークショップでは、楽器やおもちゃなど様々な木工体験が楽しめるイベントでした。

私たち学生は、それぞれのブースでおもちゃの説明をしたり、子どもたちが安全に遊べるよう環境を整えたりするボランティアをしました。イベントが始まる前に木育や木のおもちゃについての説明を聞いて、木育とは木と触れ合い、木に学び、木でつながりながら豊かな感性を育てていくことだと学びました。また、このイベントにあった木のおもちゃには、遊ぶルールがなく、五感をフルに使い、子どもたち自ら遊び方を発見していくものであることを知りました。イベントに参加していた子どもたちは、「こうして遊ぶの」や「このおもちゃ知ってるよ」と、私に教えてくれました。

このボランティアを通して、同じおもちゃでも子どもによって遊び方が違うのが面白く感じました。だからこそ、子どもたちが自ら遊びを発見できるように見守る関わり方が大切だと学ぶことができました。また、子どもたちから大人まで夢中になって遊べる木のおもちゃは素敵だなと感じました。貴重な体験ができたので、今後の保育に活かしていきたいと思っています。

練り物商品を使用したレシピ考案について

生活科学学科 食物栄養専攻 2回生 森 ゼミ (スギヨガールズ)



私たちは、卒業研究で練り物商品を使用したレシピ考案を行ないました。はじめは、調理実験をしようか、それとも調理における調査をしようかと悩んでいましたが、石川県の練り製品の会社‘スギヨ’から、レシピ開発の依頼があり、『やりたい!』とすぐに返事をしたのが、私たちスギヨガールズの始まりです。

すぐに、私たちなりにレシピを考えましたが、すでにレシピ本になっていたり、スギヨのホームページで掲載されていたりと、新たなレシピを考案することが、こんなに困難なのかと衝撃をうけました。たくさんのレシピを思いつくまにメモをし、ホームページや料理本もたくさん見ました。試作もたくさん行いました。試作中に、先生からのアドバイスを受け変更したり、メンバーの中で様々な意見を出し合い試行錯誤して、ようやくスギヨの本社の方や広告会社の方、FBCのカメラマンを交えて、一回目の試食会を行ったときは、どんなコメントがあるのか、とても緊張しました。



夏には、スギヨの本社や工場・農場を見学しました。実際にカニカマや加賀揚げを作っている工場内に入り、目の前で完成されていく練り物製品を見ることができました。考案したレシピの中の2品が農場レストランで提供されており、シェフからお客さんから盛況だという話を聞くことができ、大変感激しました。



また、学祭では、カニカマ担々麺を提供し、250食を売りました。目標は300食だったのですが、大雨の中買いに来ていただいたお客さんに、美味しいよと言っただけでとても嬉しかったです。



最後には、スギヨ本社の方、広告会社の方、先生方や職員さんにたくさんお世話になり、想像以上のレシピ集が出来あがりました。卒業研究を通して、授業で学んだ調理方法や技術などを活用し、さらに発想力が身につきました。これから、私たちは栄養士や食品会社で働きます。この経験を元にいろんなことに挑戦していきたいなと思います。

栄養研究サークル活動報告

生活科学学科 生活情報専攻 2回生 堀口 菜々美

6月にはグリーンセンターにて開催された「フラワーグリーンフェア」でパウンドケーキの販売を行いました。プレーン、ココア、抹茶などの定番の味を用意して、伝統のパウンドケーキを食べていただけるようにしました。売り方なども工夫したため、たくさんの人にパウンドケーキを買っていただくことができました。9月にはマイアクアにて開催された「もりのわフェスタ」に参加しました。もりのわフェスタではほうれん草とかぼちゃの味を増やして、野菜が苦手な方でも食べやすいパウンドケーキに仕上げました。野菜のパウンドケーキはとても人気があり、すぐに売り切れてしまいました。

サークル活動を通していろいろな体験ができました。計画的にたくさんのパウンドケーキを作ることの大変さ、おいしかったよと声をかけてくださったときのうれしさ、栄養研究サークルのパウンドケーキを楽しみにしてくださっている人の多さを実感しました。はじめは作るパウンドケーキの多さに圧倒されて、作り終わられるか不安になったり、伝統のパウンドケーキを作ることにプレッシャーを感じたりしました。しかし、実際に販売してみると「仁短のパウンドケーキおいしいよね」「毎年楽しみにしているよ」などと声をかけてくださる方

やたくさん買ってくださる方がいて、頑張って作ってよかったなと思いました。作っているときの不安も自分たちが販売することで払拭できましたし、買ってくくださった人の反応を直接見ることで、次も頑張って作ろうと思える活力になりました。

サークル活動を通して学んだことや体験は一生忘れないものになりました。



親子向けイベント「はらぺこあおむしらんど」

幼児教育学科 2回生 賞雅ゼミ(べんべんゼミチーム)

日時:令和元年12月1日(日) 13:00~16:00

会場:仁愛女子短期大学 F館

賞雅ゼミでは親子や家庭を対象とした卒業研究を行うことになったので、私たちは「親子の愛着関係」を研究テーマとして、親子を対象とした遊びのイベントを企画しました。保育実習や10月の学園祭「じんあいこどものくに」での経験も踏まえながら、どんな遊びをするか考え、全体を子どもたちの大好きな絵本「はらぺこあおむし」のイメージで構成することにしました。イベント開催前は、遅くまで学校に残って準備をしました。

当日は、子ども60名、大人40名程がご来場し、子どもたちは輪投げ、的当て、新聞紙プールの宝探し、手遊びなどを楽しんでくれました。保護者の方同士、打ち解けて談笑する様子も見られました。終了時刻になっても帰りがたらない子どもがいて、保護者の方からは「毎月開催してほしい」

との声もありました。アンケートには「あんなにたくさんの新聞紙の中に入って、子どもたちは大興奮でした」「ほど良いスペースや遊びに、親子で楽しめました」「あおむしの装飾や、危険箇所への配慮など環境までしっかり整えられていた」「学生さんがニコニコで対応してくださって、とてもありがたかったです」などの感想をいただきました。

この日は、折に触れて親と視線を交わし合いながら遊びを楽しむ子どもの姿を見ることができました。「愛着をもとに遊びに向かう」ということを改めて学ぶことができたと思います。



じんあいこどものくに

幼児教育学科

日時:令和元年10月19日(土) 9:30~15:30

会場:仁愛女子短期大学 E館

仁愛女子短期大学幼児教育学科では、「仁短祭」において子ども向けのアトラクションを集めた「じんあいこどものくに」を開催しています。「子どもたちは楽しんでくれるだろうか・・・」「安全面は大丈夫かな。」と授業や実習で学んだことを活かしながら、クラス毎に取り組みました。各クラスの内容は次の通りです。

- 1-A ドリームバルーンランド
- 1-B 動物園を作ろう!
- 1-C ハロウィンのおぼけやしき
- 2-A キッザニア 〜おしごとしてみよう〜
- 2-B それいけ!ちびっこアイランド
- 2-C 劇「大きなパプリカ」

当日は雨にもかかわらず、たくさんの来場者があり、子どもたちの元気な声がE館に響きました。



〈 学生の感想 〉

● 幼児教育学科 1 回生 近藤 琉璃亜

私たちのクラスは風船やボールを使って「バルーンランド」をしました。事前にボールプールで使う景品の折り紙をみんなで折ったり、子どもたちが喜んでくれそうなかわいい風船を選び膨らましたりしました。時間がない中で準備をすることは大変でしたが、当日の楽しそうな子どもの様子を見て不安だったことや大変だったことを忘れるくらいで、とても嬉しくなりました。また、楽しむ子どもの写真を撮ったり子どもと一緒に遊んだりする保護者の方々の姿も見ることができ、私たちも温かい気持ちになりました。

● 幼児教育学科 2 回生 坂井 愛彩

私は、実行委員長を務めさせていただきました。当日までに準備すること、当日の流れなどを先生とよく話し合い、限りある実行委員会の中で計画的に活動を進めました。準備の段階では、実行委員長としての準備の他に、クラスの活動の準備もありとても大変でした。しかし、当日それぞれのクラスで遊びを楽しんでいる子どもたちをみて、とてもやりがいを感じました。また、実行委員長として、クラスの代表として活動をし、やり遂げることが出来たということが、自分の自信になりました。

